

3
March

2007

弘前大学

学園だより

題字：遠藤正彦 学長

VOL.154

CONTENTS

- I 巻頭言 弘前大学長
遠藤正彦 2
- II 特集
「弘前大学を
去るにあたって」 5
- III 研究室の紹介 20
- IV 新任教員自己紹介 24
- V けいじばんコーナー 25
- VI 編集後記 26



制作 教育学部学生 長久保怜美

特集
「弘前大学を去るにあたって」



I 巻頭言

学 長
遠 藤 正 彦



弘前大学を去る学生 及び教職員の皆様へ

皆さんの作り育ててきた弘前大学の誇りについて

本年この春3月の訪れを待って、
本学の学部を卒業される、または大
学院を修了される学生の皆さん、そ
して定年により退職される教職員の
皆さん、卒業、修了、そして定年退
職、誠におめでとうございます。

それぞれの方々共に、長い年月
でありました。今までのそれぞれ
のお立場での御労苦や御努力に心から
の敬意を表し、無事にこの日を迎え
られたことをお祝い申し上げます。

皆さん方は、それぞれ様々な思い
出をお持ちでしょう。そして、それ
ぞれの方々がこの弘前大学で学び、
又は教育・研究し、管理運営に携
わったことに、充実感と満足感をお
持ちのことと私は確信しています。
その充実感や満足感の中に、学び、
勤務した本学の誇りを感じておられ
るでしょう。私も本学に強い確固た
る誇りを持っています。その誇りに
ついて、私なりに語ってみましょ
う。その誇りこそが、皆さんと共に
築いてきたものそのものです。

整備の進むキャンパス

皆さん、今皆さんが後にしようと
している弘前大学を、弘前大学正門
に立って弘前大学を見てみて下さ
い。皆さんは等しく、入学した時、
または本学に採用された時、又は転

勤してきた時に比べて、弘前大学は
ずいぶん変わったなと思われるで
しょう。

それは、正門も変わりましたが、
正門から見た風景は、雑木が生い茂
り、無数の自転車が乱雑に放置され
ていたキャンパスが一変して、整然
としたたすまいを見せています。
正門入ってすぐ右手に旧制弘前高等
学校外国人教師館がみえ、その教育
学部に通じる正門通りには、旧制弘
前高等学校を記念した「青春の像」
が建ち、そのすぐそばには、本学の
ヒマラヤ等の初登頂を記念した「初
登頂の碑」が新たに建ち、そして端
正な姿の創立50周年記念会館があり

ます。一寸目を転ずると、附属図書
館と総合教育棟の間の広い道に、人
文学部、理工学部、そして更に遠く
農学生命科学部が見えます。そこ
にはシックな街灯が整然と並んでいま
す。

本学を訪れた市民が驚くのは、富
田大通りからは隠れて見えないこの
整備された文京キャンパスの存在で
あり、弘前大学のキャンパスがこん
なにきれいだとは知らなかったと
語ってくれます。オープンキャン
パスに来学した高校生も、異口同音に
弘前大学はきれいだと言ってくれま
す。但し、今改築・改修中の本町
キャンパスの整備は、その工事が済



キャンパス広場





んでからのことにはなりますが、取り敢えず、この文京町キャンパスの整備が、皆さんの去られるこの3月に間に合ったことに安堵しています。

皆さん、この整備の進んでいるキャンパスに誇りを持って、記念写真の一枚も撮って行って下さい。数年後、文京町・本町の両キャンパスはもっと整備されることになるでしょう。

本学の歴史

昨年9月教育学部が、教育学部の前身である青森県師範学校の明治9年の創立から数えて130年に当たるので、教育学部創立130周年の記念式典を催しました。明治政府は、明治5年学制を公布後、当時の全国の主要都市に現在の高等教育機関の原点になっている各種の学校を設置しました。その一つが前述の明治9年創立の青森県師範学校です。したがって、本学にも130年の歴史があることとなります。このことは、本学の関係者があまり気にも留めなかったように思いますが、これは本学関係者が誇るべき本学の歴史です。

この130年は大変な苦難の道であったと思います。特に、この青森県師範学校と共に、旧制弘前高等学校、青森医学専門学校、そして弘前医科大学が統合して新制弘前大学が設置されました。その設置から今日まで、このたび退任される教職員の多くが、その苦難と発展の歴史を共に歩んできたこととなります。新制大学として発足しても、尚続く教育研究の資材不足や、校舎の不備不足、その発展の最中の大学紛争、そして大学設置基準大綱化に端を発する大学改革と国立大学法人化等々には、教職員が等しく苦悩しました。最もこのことが脳裏から離れないことの一つでしょう。

しかし、この苦難を乗り越えて、特に国立大学法人化を軌道にのせるための本学全構成員の努力は、本学の歴史の中に特記される事項で、それに携わった教職員・学生の等しく誇りとすべきことでしょう。



総合文化祭（2006年11月）

本学の体制

本学も国立大学法人化して3年、ようやく体制も整ってきました。本学は文系・理系の学問のすべての基礎的領域をカバーする、人文、教育、医学、理工、農学生命科学の5学部から成る中規模総合大学です。そして、各学部に直結する大学院が整備され、完成度の高い総合大学として発展しています。皆さんには間に合いませんでしたが、この4月より大学院部局化が進み、大学院大学の体制となります。

学生の教育

大学の重要な使命の一つは教育です。言うまでもなく、学生を教育して優れた人材を社会に送り出すことです。ですから、大学の誇りは、実はキャンパスのきれいさでも、大学の学部数や体制でもなく、誇らなければならないのは、学生そのものです。自校の学生を誇ることができなければ、大学としては失格でしょう。学長は、社会に向かって、本学の卒業生の品質を保証しますと、度々明言しています。

その品質保証される学生を育てるための教育の特徴は、教養教育(21世紀教育)と専門基礎の重視とその充

実にあります。その教養教育には、その充実さに定評があります。そして、学生のコミュニケーションを重視した、クラス担任制にあります。これらが可能なのも、本学が文系・理系の5学部から成る小回りの利く中規模総合大学だからであります。そして、専門基礎重視の立場から、全学にコアカリキュラムという考え方が徹底しています。これらのことも考慮されて、理工学部と農学生命科学部の一部の講座では、JABEE(日本技術者教育認定機構)の認定を受けています。本学の教育レベルそのものは、かなり高いと言えます。

学生の活躍

その学生の品質保証の裏付けは何かと問われれば、私は自信を持ってこう答えます。大学全入時代とはいえ、本学は全国から学生が集まってくる全国区の大学です。その学生は、礼儀正しいし、明るいし、私が構内を歩くと挨拶し、声をかけてくれる学生が沢山います。就職率は抜群です。国家公務員・地方公務員試験合格者も多数おり、また各種の国家試験の合格率も高位です。

課外活動では、ロボットコンテスト優勝、剣道部、居合道、弓道、ラグビー、野球、水泳等々の体育系統





文京キャンパス

技で優勝・入賞は沢山あります。また、吹奏楽団は東北コンクール銀賞、混声合唱団は全国コンクールで銅賞、全国コンクールこそないが弘前大学フィルハーモニー管弦楽団は、ブルックナー、ブラームス等の難曲をレパートリーとするハイレベルのオーケストラです。全国740余の国公立大学の中で、オーケストラのある大学も数少ないですし、また、これほどのレベルの高さを持つのは更に少ないでしょう。

特筆すべきは、山岳部の現役・OBのパーティーのヒマラヤ初登頂という実績であります。歴史と伝統と資金力のない地方大学の山岳部が、海外遠征登山を重ね、遂に2山の世界初登頂、10山以上の初登攀、そしてアルタイ山脈全長330kmの世界初縦走を成し遂げました。世界山岳部の注目するところです。

学生のボランティア活動や、市民と交流を続けながらの街づくり活動等々。そして、総合文化祭の毎年倍加するあのエネルギーは、正に驚異的であります。私が本学学生の質の保証の拠り所をするものは、他にも多数あります。すばらしいなと自慢できる本学学生です。

研究

本学の研究は最近とみに進んできました。昨年、国立大学協会が公表した全世界の論文公表ランキングでは、全世界数万といわれる研究機関の中で、本学は900位から1000位以内にランクされ、我国での数千といわれる研究機関でも91位以内にランクされました。本学の研究が着実に進んでいるとみるべきです。

本学の教員による学会賞受賞も数多くあり、大学院学生自身の研究で学会賞・金賞・銀賞を受賞する学生は毎年輩出しています。

そして、本学の出版会は国立大学法人化後に設立されてまだ2年半ですが、本学教員により刊行された書籍は21冊です。地方の大学出版会としてのこの出版の実績には、全国から注目されています。そして本学では、教員による本学学生の教育のための教科書作りが進んでいます。

本学のある弘前市

皆さんが学び、または勤務した弘前市は、すばらしい都市であったと思いませんか。城下町、学園都市、田園都市等と言われてきました。そ

れよりも、この弘前は歴史的には東北第2の都市であったことが忘れられています。徳川幕府は、東照宮を仙台と弘前と出羽三山に置きました。明治維新前後、キリスト教宣教師は函館に次いで弘前にやってきました。

明治政府は軍隊を、仙台に第2師団と弘前に第8師団のみを置きました。旧制高校は、仙台・第二高等学校、山形・第十四高等学校、弘前・第十六高等学校でした。そして明治22年の市制は、東北では仙台、弘前、盛岡等6都市のみでした。歴史的には第二の都市です。第二次世界大戦中、軍師団司令部があって空襲を受けなかったのは、恐らく、弘前だけだったでしょう。

だからこそ、弘前には古い町並と緑とお城と文化が残っているのです。我々が勉学するのに最も優れた街であったと、今思い出しませんか。

学外の多くの方が、弘前大学は最近変わってきたとの印象を語ってくれます。そして、毎日のように弘前大学のことが新聞の記事になっているとの指摘も事実です。これが弘前大学の自信であり、誇りにつながるものです。これは本学の構成員全員の努力の姿であると思います。こうした本学の状況について、これから社会に出る卒業生、修了生の皆さんには、自信と誇りの根拠とすべきもので、退職される教職員には、本学の思い出を語る一頁だと思えます。

この度本学を去られる学生、教職員の皆さんは、この現在の弘前大学の発展に大きな力を貸してくれました。心から感謝しています。これからは、皆さんが育ててきた弘前大学に誇りを持って活躍して欲しいと、強く強く希望します。そして、本学を去られる皆さん、弘前大学のこれからの発展に声援を送って下さい。御健勝を祈念致します。

御健勝を祈念致します。





Ⅱ 特集「弘前大学を去るにあたって」

学部、大学院を卒業、修了する代表、並びに31名の定年退職者のうち25名の方から寄稿いただきました。

弘大を去る にあたって



人文学部 思想文芸講座 教授
五十嵐 靖彦

私が倫理学担当の専任講師として人文学部に着任したのは、昭和50年10月1日でした。以来31年余りが経過し、この3月定年退職する運びになりました。出身大学で助手を短期間勤めた後の最初の赴任地が弘前大学だったわけで、いわば人生のほぼ半分を当大学で過ごしたことになります。この機会にしっかりした総括を文章化すべきなのかもしれませんが、1月下旬のこの時期は年間を通じて、期末試験や論文審査で最多忙期に当たりますので、丹念に記録を調べた

りじっくり懐旧にふけったりする余裕がありません。思いつくままを綴ることにします。

個人的心境としては、「嬉しさ半分、淋しさ半分」というところでしょうか。大過や大病もなくよくやって来れたな、これでゴールインだというのは、一定の達成感を与えてくれます。加えて、18歳人口の減少・大学設置基準の大綱化・国立大学法人化の流れの中で大学間に働く競争原理がいよいよ激化してくるこの時期、従って、外部資金獲得競争、認証評価に耐える厳しい自己点検、否応もない任期制の検討等といった課題が山積する多難の時に、これらと向き合わないで済むというのは、残る人たちに悪いような、ほっとするような気持ちになります。これらが「嬉しさ」の中味でしょうか。だが、これで用済みだよ、社会はお前を必要としないと一言渡されたような気もし、一抹の淋しさを覚えることも事実です。これは何事にも終わ

りがあることですからやむを得ないものとし、潮時なんだ、と割り切って今後の生活設計をすべきなのでしょう。淋しさとはちょっと違う感情ですが、心残りというか、残念と思うこともあります。近年の大学教育のレベルはかなり下がってきたな、ということです。昔は入試科目も5教科7科目が普通だったし、外国語も2科目16単位必修、卒業所要単位も138単位だった。今はそれぞれ1科目8単位、124単位になっています。ブラックジョークですが、「ゼミ生を多く取りたくなければ、ドイツ語かフランス語をテキストにすればいい」と囁かれたこともあります。これも時代の流れと達観するしかないのかも知れません。

ともあれ、これまでご厚誼をかたじけなくした関係各位に感謝しますと共に、弘前大学の教職員の皆様のご健勝と将来の益々の発展を祈念いたします。

弘大を去る にあたって



人文学部
ビジネスマネジメント講座 教授
藤田 正一

弘前大学に昭和58(1983)年4月に赴任してから24年間、思い出の多い教育・研究生活でしたが、特にその一端を述べるとするならば、以下このことを述べなければならない。

その第一としては、教育行政事務能力が皆無に等しいにもかかわらず、昭和61(1986)年度、学務委員長を引き受け、4月教授会終了までの超多忙時期が過ぎてホッとしている時、人文学部校舎強制捜査の知らせを受け、それへの対応策と事態収束に没

頭せざるをえなかった頃のことです。すなわち、新年度の学生に対するオリエンテーションや報告事項並びに審議事項の多い4月教授会終了までの超多忙時期がようやく過ぎ、研究室で9月に開催される日本経営学会第60回記念大会での研究報告予稿に取り組んでいた昭和61年4月24日(木)午後4時前、当時の学部長の秋月観暎先生から、明日早朝6時から、「本学部校舎1階経済学科第4学生共通研究室」と、「原発研究会サークル室」が県警によって捜索令状の下に強制捜査されることになり、その対応策を協議しなければならないので、学部長室に至急来るようにという旨の電話があり、直ちに学部長の秋月先生を中心に、当時の学務委員の清水明先生、長谷川成一先生、新井一夫先生、当時の事務長の工藤速雄さん、庶務係長の大竹康文さん、学務係長の鳴海清方さんと私の8人でその対応策について夜遅くまで協

議し、翌日から県警や学生自治会等の関係者に対応し、日常の学園生活を取り戻すまでの頃のことです。協議で一致したことは、現場に一切手をつけず、強制捜査終了までは口外せず、関係者に対して誠心誠意をもって真摯に対応し、日常の学園生活を一日でも早く取り戻すように努めていくということでありました。

翌日、学部長を中心に、険悪な事態とならないことを祈りつつ、張り詰めた気持ちで、誠心誠意、真摯に「県警」や「学生運動家の中で当時一番過激であるといわれていた中核派によって掌握されていた本学の学生自治会」に対応した結果、予測していたより混乱は少なく、事態の収束をはかっていくことができたことは、忘れられないことであります。

第二としては、本学が自由な雰囲気と恵まれた研究条件を与えてくれたことと、本学の諸先生をはじめと





する多くの方々の支えと励ましによって、浅学非才な私が、前母校の札幌大学から本学に赴任してからの24年間に、単著の学術研究書2冊（『現代日本の企業形態』『わが国の公益企業の範囲と料金設定』）、共著の学術研究書3冊、学術論文28篇、報告書等8篇の公刊と学会研究報告8回という仕事をまがりなりにまなしえたことに対して、感謝の念で一杯であるということでもあります。この場をかりて厚くお礼を申し上げるしだいであります。

第三としては、受講生の真摯な授業態度によって私自身が育てられてきたことに感謝しなければならないということでもあります。すなわち、

私の担当する授業科目の受講生の大多数が、授業に熱意をもって臨んでくれ、授業を創ってくれたことにより、受講生からエネルギーをいただき、かつ、私自身が育てられてきましたので、何とかそれらのことに価値する教育と研究をしなければならないという姿勢で、弘前大学での24年間、教員生活をさせていただいたことに感謝しているということでもあります。受講生の皆様、本当にありがとうございました。

近年のわが国の財政逼迫化や社会経済環境の急激な変化や規制緩和の推進等によって、これから本学はますます独立行政法人化への方向性が否応なしに強化され、教育・研究環

境が厳しさを増していくと思われま。しかし、本学の構成員の一人一人が自らの立場で、本学のモットーである「世界に発信し、地域と共に創造する弘前大学」の実現に向け、教育・研究及び地域貢献を展開していくならば、何も恐れることはないと思います。そのためには、心身共に健康でなければならないと思いますので、どうか健康には十分に留意されますようお願い申し上げます。

最後に、弘前大学の皆様に24年間大変にお世話になったことに、“心からありがとうございました。”のお礼を申し上げ、筆をおかせていただきます。

定年雑感



人文学部 事務長
黒瀧 正観

“昔は良かった”を言い出すと老化のはじまり、“腕組みして昔を懐かしむより、手足を動かして今どうするかが大事でしょう”と言っていた自分が、“昔は良かった”と思いはじめてい

る。職場には父・母・兄貴分的な存在がいて、仕事の仕方、人間としての生き方を教えてくれた。その後ろ姿を見て将来に想いを馳せた。時間がゆるやかに流れていた。時代が変わって効率向上は必須でしょうが、何か大切なものを忘れたような気がします。大学事務に奉職して約40年、この春で定年を迎えます。その間、良き指導者、先輩、仲間にも恵まれ、幾多の薫陶をいただいて勤続できたことに、心からお礼申し上げます。それより何より感謝しなければならないのは、自身の生活基盤として弘前大学という職場があったことだと思ひます。振り返ると、大学紛

争、設置基準大綱化、法人化など激しい状況の変化がありました。嬉しかった思い出は、留年した学生さんの修学指導を担当し、彼は一念発起し、卒業式の日、晴れやかな表情で“卒業だぞ”と言ってきた、あの時の爽やかな笑顔が忘れられません。4月1日から365連休のはじまり、期待と不安、晴耕雨読、山・川と遊んで心豊かに暮らしたい。学生さんの瞳は輝き、職員は生き生きと、弘前大学がそのような教育の場・職場でありますようお祈りして、新しい生活への歩みを始めさせていただきます。ありがとうございました。

弘大を去るにあたって



人文学部 総務グループ係長
阿部 美雄

定年が待ち遠しいと思っていたら、あっさりと今年で5回目の亥年を迎えてしまった。

積雪が無かった今年の正月のように、定年後も穏やかに過ごせたらと思っている。

しかし、まだ実感が湧かないのは、楽天家のせいだろうか？

皆さんが定年を迎える頃は、弘前大学も名門となつて、夢が持てる世

の中であつたらいいなあ。お世話になりました。感謝！



弘前で の経験



人文学部 情報マネジメント課程
小林 史明

仙台から高速バスで弘前に来て、タクシーの運転手さんの津軽弁が聞き取れずに苦笑いをするしかなかっ

た日を思い出します。あれからいつの間にか4年が経ち、今では津軽弁もかなりわかるようになりました。

正直、何か大きな目的があって弘前大学に来たわけではありませんでしたが、予想もしていなかったような様々な経験をすることができました。その中の1つが学生ボランティアです。内容は、罪を犯し試験観察になった少年に勉強を教えることを通して更生の手伝いをするというものでした。ボランティアを行う前は「試験観察中の少年」というだけで、偏ったイメージを持ってしまってい

ましたが、実際に話してみるとごく普通の気さくな少年でした。この経験は、私が持っていた固定観念を取り去ってくれました。肩書きなどにとらわれず、その人自身を見ること、相手の立場から物事を考えることの大切さがよくわかりました。

こういった貴重な経験ができ、多くのことを学べたのも大学で出会いに恵まれたからだだと思います。ご指導いただいた先生方、先輩、後輩、友人、お世話になった多くの方々へ心より感謝いたします。

学び続けること



人文学部 情報マネジメント課程
村岡 翔吾

僕は目をつぶり、この4年間を振り返る。すると、そこには何も無いようで、多くの壁にぶち当たりなが

らもその壁を乗り越えようと、一生懸命な自分がいることに気づく。

今でも胸を熱くするのは教育実習である。僕は4年生の春、母校に戻り、たった2週間ではあるが教師として多くの生徒と触れ合うことができた。期待と不安を抱きながら教壇に立った僕が直面したのは、伝えること、教えることの難しさであった。六つしか年の変わらない生徒に、自分がかつて学んだように授業を行った。しかし、それは万人に分かる説明ではないのである。一のことを伝えるためには十のことを知る必要があり、

その知識を元にいろんな説明の仕方、技術を持たなければならないということ、教育実習での経験は僕に教えてくれた。

これは社会に出る僕に役立つスキルである。これから出会うであろうたくさんの人に、僕は必要以上の知識を持って接して行きたいと思う。大学を卒業しても常に勉強していくこと、これが僕の大学生活四年間で得た教訓である。そして、この教訓を気づかせてくれた、4年間で出会った全ての人に感謝したいと思う。ありがとう。





二足の草鞋



教育学部 理科教育講座 教授
星野英興

イトーヨーカドー弘前店の開店初日とみちのく銀行開業初日とが重なった昭和51年10月1日付けで、弘前大学教育学部・化学の教員として赴任した。平成19年3月31日、理科教育講座・物理学の教員として退職する。

弘前大学赴任と同時に、西ドイツ留学中に研究を共にした京都大学理学部・遠藤裕久先生との液体半導体の物性に関する共同研究が始まり、現在でもその研究は継続している。一人でできる測定実験のほとんどは、弘前において夏季及び冬季休業中に

行った。KEKにおけるEXAFS測定は理工学部・宮永崇史先生、中性子回折実験は新潟大学・丸山健二先生の協力を頂いている。その成果を液体及びアモルファス金属国際会議、液体物質国際会議及び日本物理学会年会等で公開してきた。物性物理学の先端的研究に携わってはいたものの、化学に関する講義・実験等には何の違和感もなく没頭していた。卒業実験では、ゲル及び水溶液中で単結晶作成、金コロイド、十円硬貨の汚れ、過酸化水素、銀ゼオライトの加熱着色、クレーピング、シュウ酸鉄の熱分解、電気分解等、結果が目に見える課題を取り上げた。

赴任して21年目に転機が訪れた。平成10年4月弘前大学大学院教育学研究科・教科教育専攻・理科教育専修の立ち上げに伴い、平成9年10月1日付けで理科教育専修・物理学分野担当に換わった。当時私のもので卒業実験を行っていた学生の中には、物理学への所属変更には難色を示す者も出て、化学と物理学の間に立ち

だかる障壁を思い知らされた。物理学の教育では、虫ゴム、ゴム風船、太陽光、雪と氷、落下する雨粒の形、砂の団子、コンセント、円柱レンズによる屈折、方位磁針、砂鉄等の話題を取り上げ、平易な解説と演示実験を励行し、学生には根っこに戻って考えてもらうことを心掛けた。大学で初めて物理学を履修した学生には「分かるほどに知りたくなる物理学」を、理科の教員免許取得を志す学生には「理科における化学と物理学との切っても切れない相互関係の理解」を目指した。

また、単結晶作成、銀ゼオライトの加熱着色、シュウ酸鉄の熱分解、金コロイド等の実験を、物理学の視点で見直せた収穫もあった。この30年余、苦楽を共にした100名の卒業生・大学院修了生との出会いと学びは忘れがたい。

化学と物理学の「二足の草鞋」を履ける機会を与えて下された理科教育講座並びに教育学部の皆様に、心から感謝している。

「今、弘前大学が面白い」を念じつつ



教育学部 国語教育講座 教授
山口 爲 廣

「十年一昔」と言えば、弘大での十三年は決して短いとは言えません。しかしやはり短かった。これが実感です。自らの諸々の夢が夢のままで終わったという、理由はそのことに尽きるようです。無論全て己が菲才によるものではありませんが…。

思いもよらない北国津軽との、弘大とのご縁。これはきっと何かがあると、ワクワクした気分での赴任が、今は何とも懐かしく思い出されます。そしてアツと言う間の十余年でした。

時は、大学変革が叫ばれて喧しく、特に大学の評価が問題となっていく中、弘大に奉職する者としての第一の関心事は、憚りながら、やはり弘大の大学としての評判でありました。「今、弘前大学が面白い」と、その声が全国に澎湃と湧き起こってくれないものかと、そのことを願いながら…。それは未だ夢のままでありますが、十余年はきっと短か過ぎたのでしょう。しかし、そういう時が是非来てほしいと、今なお切に願っています。世はまさに大学変革の時代。他に例を見ない発想や工夫が思いもよらない価値を生む、今はそういう時代のですから…。これが奇を衒うことと無縁であること言うまでもありません。大学にとって何より大切なことは教育と研究でありましようが、それが、徒らに社会の動きに迎合し、本質的な、或いは基礎的な勉強をなおざりにするものであってはならないと思います。折角のご縁をいただいた大学、たとい大

いなる工夫と発想の転換があろうとも、王道に順った堂々たる発展であることを願わずにはられません。

ところで、弘大での十三年間、ほぼひたすら専門の漢文学を講ずる機会を与えられたことは何より幸せなことでありました。殊に、漢文の授業のない小学校や中学校の教師を目指す学生に漢文を教えたこと、或いは共に漢文を学んだことの意義は大きかったように思われます。そのような学生に何故漢文なのか、或いは今何故漢文なのかと、自ら反芻しながらの授業は、実は意外に本質的であり、常に新鮮であったと実感しています。また、基礎学力の不足した学生を相手にすることも、確かに厄介なことではありますが、その過程で自らの理解の不十分さに気がつくことも一再ならず。これもまた有り難いことでありました。学生に感謝しなければなりません。学生の不勉強をかこってばかりもいられないようです。



学生に望みたいことも勿論あります。この十余年、嘗ての「安保闘争」や「学園紛争」時のことが妙に懐かしく思われてなりません。あの運動を是認し賛美するつもりは毛頭ありません。あのような運動の再燃を望むつもりは更にありません。しかし、あの学生達が妙に魅力的に思われるのです。そしてその魅力は間違いない若者らしい活力、正義感、

反骨精神に根ざすものです。これら言わば若い学徒の特権が失われて、或いは影を潜めて既に久しく、大学祭の低調がそれを何より如実に物語っているように思われます。このことは現下の大学の一般的傾向ではありますが、弘大生には是非他に先んじて目覚めてもらいたいものです。近年、弘大の大学祭に幾分の活気を覚えるのは、或いはその芽生えかも

わかりません。是非そうであってほしいと思います。

大学の力は何より学生に負う所が大きい。若い学徒がいかにもそれらしくなった時、「今、弘前大学が面白い」が現実のものとなり、「名山名士を出す」(陸羯南^{くがかつなん})が恰も弘前大学のこのように蘇って来るのではないのでしょうか。 深 謝

ありがとう ございました



教育学部 理科教育講座 教授
齋藤 捷一

太平洋戦争（昭和16年12月8日開戦）を戦前・戦後の区切りとすると、私は学内では数少なくなった戦前生まれです。東京で産し、その後山形・東京・北海道・大阪と移り住み、昭和60年10月より弘前大学教育学部に赴任して、21年6ヶ月。弘前が最も長くなりましたが、あっという間の出来事と感じています。

この間、毎日私が対峙していた主な相手は、毎年人変われども18歳～23歳の若者達でした。3年間（附属小学校長）は6歳～12歳の児童も加わりました。学生と児童諸君から若

さと元気をもらい続け、気がついたら、当初20数年の歳の差が今では50年を超えていました。

この交流史のキーワードは：

- 1) 生物、プロチスタ、五界説、進化、培養実験、プランクトン、緑藻、ゴニウム、ヘマトコッカス、ボルボックス、ラン藻、アナベナ、ミクロキスティス、珪藻、渦鞭毛藻、ゾウリムシ、ミジンコ、ワムシ、ベントス、寄生虫、etc.
- 2) 湖沼生態、津軽十二湖湖沼群（33湖沼、落口の池、王池、日暮の池、他）、溶存酸素、水温躍層、透明度、季節変動、リン、窒素、DOメーター、フィールド調査、ゴムボート、バンドン採水器、プランクトンネット、etc.
- 3) 学校教育、理科、物化生地、理科教育、自然、自然教育、地球環境、南極、ネパール、環境教育、教材研究、授業実践、教育実習、指導案、指導要領、実験、

野外実習、科学と技術、理科離れ、etc.

- 4) 全校朝会、入学式、卒業式、始業式、終業式、運動会、学習発表会、修学旅行、etc.
- 5) 卒業論文、青春とは、愛とは、生きるとは、研究とは、学問とは、教育とは、etc.

教えることより教えられることの方が多く、衣食住の心配せずに家族を養え、これらのキーワードを基に大学生活ができたことは、何と幸せであったことか。皆様にどれだけお世話になったことか。皆様に助けられてきた月日であったことは言うまでもありません。

皆様（先生方をはじめ、お名前を挙げていくと何頁にもなってしまうので省略）にまとめて一言、心より感謝を込めてどうもありがとうございました。残りの人生は、あと数年(!)あるいは10年、数10年(?)。どうやってこの恩返しをするか。考え続けていきたいと考えています。

退職雑感



教育学部 附属学校グループ係長
金澤 正彦

私は昭和40年附属病院整備係に採用されました。附属病院でも鉄筋の建物は第一病棟と第二病棟だけで、それ以外は木造2階建てで石炭ストーブの煙突が林立している時代でした。

一番印象に残っている出来事は、藤崎農場にいた平成3年9月の台風19号です。一面に赤いリンゴの絨毯と化したリンゴ畑を教職員が協力して災害復旧したことは忘れられませ

ん。

これまでお世話になった全ての方々に心から感謝申し上げます。

文部科学省



多くの出会いを通して



教育学研究科 学校教育専攻
学校教育専修 教育学分野
津村 公栄

「出会い」それは人を大きく成長させるものとよく言われるが、私にとって本修士課程での日々は、教育学科の先生方・同期・後輩との「出

会い」によって多くのものを得ることができた二年間であった。そもそも、なぜ私がこの教育学科を選択したかという「実験をせずに理科教員の専修免許が取得できる」という浅はかな動機からであった。そのため、無礼にもどの先生がどういった研究をされているのか全く把握せず入学してしまった。

大学院の講義は週7時限と少なかつたものの、毎週、何らかの講義でレジュメを作成して発表しなければならなかつたため、知識の薄い私は毎日のように遅くまで学校に残って文献・資料と睨めっこをしなければならなかつた。時には英訳が全く

できず、研究室の窓から飛び降りようと思ったこともあった(笑)。しかしながら、そういった日々を続けるうちに先生方から多くの知識を吸収することができ、幸いにも難関といわれる小学校教員資格認定試験にも合格できた。このお陰で、今年から故郷の神奈川県で小学校教員として勤めることになったわけだが、これから接していく児童達にこうした「人と人とのつながり」の大切さを身を持って教えていければと思う。この二年間は色々な意味で成長させられた二年間であった。特に学科の先生方には本当に感謝したい。



激動の4年間

教育学部 養護教諭養成課程
清塚 更
教育学部 養護教諭養成課程
東島 利佳

私達の4年間はこんな感じでした。
1年生 何がなんだかわからないまま1年が過ぎた。意味もなく学校探検をして、教授に五月蠅いと怒られた。21世紀教育科目での人間観察が楽しかった。函館に学科のみんなで2泊3日の旅行に行った。何もかもが新鮮で楽しかった。
2年生 授業がキツキツで毎週レポートに追われていた。しかし、何かと理由をつけてはお疲れ様飲みをして学科の仲が深まった。
3年生 専門の授業が増えたり、教員採用試験の勉強を始めたりした。初めての実習で、教壇に立って、自分の授業をした。将来についてたくさん悩んだ。

4年生 1ヶ月間の養護実習。保健室で、養護教諭の大変さや楽しさを知った。毎日充実していて1ヶ月がとて短かった。絶対養護教諭になりたいって思った。卒業論文が大変で毎日悩まれたが達成感を味わえた。みんな本当に頑張った！
4年間、あっという間に過ぎました。振り返ってみると、私たちはこの大学・学科で沢山の人の出会い、良い事、悪い事を経験して人間的にとても成長したと思います。周りの環境に恵まれていたとしみじみ思います。これからの人生に影響を与えるであろう4年間だったと思います。支えてくれた沢山のの人に感謝します。本当に良かった(^_^)



退職にあたり



医学部 内科学第1講座 教授
棟方昭博

弘前大学医学部を昭和42年に卒業し、一年間のインターンを経て昭和43年に第一内科に入局して以来、40年近くを附属病院で臨床や研究生活を送ってきましたが、早いもので3月にはゴールに到達することになりました。

思い出すことは若い頃の生活です。卒業時は全国的なインターン闘争の真っただ中にあり、国家試験を一度

ボイコットしましたが、教授会から強く受験を薦められ、結局は半年後に受験しております。消化器病学会の評議員で「42の会」という、昭和42年卒業の同志が懐古談する集まりがあります。年1回の集まりでは必ず各大学でのインターン闘争が話題になるほど、我々の青春はインターン闘争から国家試験ボイコットで占められておりました。平成16年より2年間の卒後臨床研修の義務化が施行されましたが、その内容に医療人を育成する立場から見ると問題が多く、実りのある制度となるか今後の推移を見守りたいと思います。

入局してからは大腸スコープの開発にエネルギーを費やしました。当時は直腸の観察しかできず、当時アメリカから技術導入されたファイバースコープの実用化の途上にあり、暗室での透視室での長時間の検査を

強いられました。開発途上のスコープであり、故障が頻発し、その都度東京のメーカーまで夜行列車往復で修理に走ったのが思いされます。幸いなことに昭和44年には盲腸まで挿入が可能となり、大腸疾患の病態が次々と明らかにすることができ、学会等で多くの発表ができました。当時の松永教授、田島講師の下に多くの外国人が見学に来弘し、休日等には十和田湖に案内するなど英会話のスタートもこの頃からです。その後国際学会でのシンポジウム等で、来弘した先生方から色々サポートされたのが楽しく思い出されます。

近年は臨床に役立つ内視鏡治療の開発を行ってきましたが、幸いなことに最近話題の多い医療事故に遭遇することも無く退職できることを幸いに思っております。

弘大を去るにあたって

医学部 附属病院放射線部
副診療放射線技師長
尾崎博一

私が東北大学医学部附属診療X線技師学校を卒業し、今は亡き篠崎名誉教授のもとで技師として働くことになったのが1968年の4月。

当時の弘前大学附属病院のレントゲン室は、加藤五郎技師長以下（松平、上田、柴田、坂本、沢田、樽沢、菅原、石田、）の技師8名と写真に斉藤、暗室に澤、（敬称略）の10名で構成されており、暗室透視2台、Aigio 1台、胸部1台、一般撮影1台、尿路1台、断層1台、RI、コバルト治療装置のモダリティでありました。

放射線科の外来は、レントゲン受付の真向かいに位置し、技師控室は

木造の階段を上った二階にあり控室では個人の机などは無く、大きなテーブルが一個、隣の部屋が技師長室で、加藤技師長がニコニコしておりました。

昼休み時間は、全員テーブルに集まり弁当を食べながら、トランプ(五人関)や当時病院の敷地内にあった高砂の蕎麦の話、軍隊時代の話、その他、物知りの話など、など、和気あいあいの時間が過ぎておりました。

そんなある日のお昼、私が控室の階段を登ったとたん技師長が「尾崎君、航空母艦から飛行機が飛び立つとき風上に向かって艦が走るかそれとも風下に向かって走るか？」の質問があり（それも切羽詰まった様子で）思わず風上に向かうと思えますと答えてしまいました、そうしたら突然、控室のみんなの笑いと拍手が響き渡り、その日の五時に、技師長のおごりで、ざる蕎麦が控室に届けられました。

そんな、春の日溜まりのような技

師控室も、3回移転し部長も3人、技師長も5人目となり、技師数も25人と現在のような大所帯になりました。

装置もCPU制御で失敗の少ない綺麗な画像が依頼科に提供出来るようになりました。

入局してから39年、過ぎてしまえば短く、その間、医療技術及び装置の進歩がめまぐるしい中、仕事を続ける事が出来たのは、職場の仲間や、病院スタッフの皆さん、いろいろな場所でいろいろな方にお世話になりました、紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

ありがとうございました。



退職にあたり

医学部 附属病院医事課課長補佐
奈良岡 喜八

42年間の勤務歴の終盤に他省庁から転出し、弘前大学の仲間に使わせていただきました。

おかげさまで、子供の頃から見慣れてきた岩木山の姿を眺めながら、津軽で退職の日を迎えることができました。

在職中は弘前大学の皆様、特に附属病院の皆様には大変お世話になり、深く感謝申し上げます。

ありがとう。

弘前大学医学部 医学科
野村 理

もう6年も経ってしまったなんて。ふんわりした日の光であたためられ、空気が春っぽくなり、桜の蕾みが膨らみ始めた晴れた日に、看板やらチラシやらを持った大学生をかきつけて、弘前市民会館に入ったときから。そして、それはきっと今年も、その翌年も繰り返されるのでしょうね。

憧れの大学生になったものの、唐突に手渡された膨大な時間の使い方も分からず、何となく想像していた生活とは違うと感じながらも、ただ

時間が経つのを待ち、通学路で見かける高校生が何故か眩しく見えたり。学年を越えても、ぼんやりした気持ちはなかなか晴れず、後輩には楽しんで過ごしてもらえる大学にしたいと考え、がむしゃらに慌てて、試行錯誤していたような気がします。

僕の大学生生活は5年生から始まった気がします。患者さんに会ってからです。患者さんから「ありがとう」という言葉から力を頂き、辛いことも乗り越えられた気がします。6年次の3ヶ月間の学外実習は6年間で、もしかしたら人生で最も楽しい時間でした。自分が努力した分だけ患者さんが早く元気になり、「ありがとう」と言って退院していく。とてもシンプルで素晴らしい経験とやり甲斐とちょっとした自信を多くの患者さんから頂きました。

本当に満足できる大学生活だったかは分からないけれども、この6年があったから今の僕があると思う。ご教授頂いた教職員の方々、大学生活を支えてくださった大学生協の方々、地域住民の皆様、そして、僕の患者さんたち、心からありがとうございました。これからは僕を育ててくれたこの地域のために恩返しをしたいと思います。



最高の 学び舎



医学部 医学科
窪 昭佳

8年前に農学生命科学部に入学し、卒業後医学部へ編入学したので、弘前では10代の終わりと20代のほとんどを過ごしたことになります。こ

の時間でたくさんの人に出会い、そしてたくさんの事を学ぶことができました。

特に編入学に関しては多くの人に支えられました。

農学生命科学部で所属していた研究室の先生方は、医学を学ぶに当たって分子生物学は必要不可欠だからと、周囲の先輩や友人達と全く分け隔てなく『RNA研究の最先端』を日々熱く指導して下さい、また、私自身の進路を最大限応援して下さいました。

その他にも、お忙しい中で仕事の手を休めて何度も真剣に私の悩み相

談に乗って下さった先生、共通教育の時代から一貫して、「頑張っているか?」とか「最近どうだ?」と話を聞いて温かく励まして下さった先生、に支えられました。

この8年間を通して、多くの人の援助により、自身の夢に向かって、自身の持てる力の何倍ものステップを踏むことができたと思います。本当に幸せで恵まれた体験でした。いつか私も、弘前大学で出会った多くの先生方のように『ある人が持ち描いた夢や希望に対して、陰ながら支えられる』そんな人、そして、そんな医療者になりたいと思います。



今は昔



理工学部 数理科学科 教授
本瀬 香

定年と言う節目に、今までの生活を振り返って見ますと、6才の春から59年間、すべて学校での生活でした。その間、生徒、学生、院生、助手、講師、助教授、教授と身分を変えましたが、鯨のような出世魚ではなかった。ただ、災害や戦争に遭遇する事もなく、健康で生活が出来たことは幸運だったと思っています。

戦争といえば、この頃、同じスペインを母国とする2人のパブロを思い出す、ピカソはゲルニカで、カザルスは鳥の歌で強く反戦を訴えた。「カタルニア地方の鳥はピース、ピースと鳴く」というカザルスの弾くチェロを聴いていると胸にじんとして涙

が出てくる。鳥の歌は非常に短いが訴えるものが非常に大きい。なぜ人は戦争をするのか、生き物である以上争いは避けられない。しかし、いかなる錦の御旗があるにせよ、無差別に命を奪い物を破壊するのは愚かとしか言いようがない。

少し横道に入ってしまいました、話を元へ戻します。岡山から赴任の時、盛岡からは、大鰐までの東北道が開通してなく高速バスがなかったもので、花輪線で弘前へ向かった。線路沿いには雪がまだたくさん残っていて家族はえらい所に来たと思った事でしょう。着任して、富田の旧外国人官舎に入居しました。玄関前には少し残雪があり、高橋宏一先生に雪かきをしていただいたのを覚えています。この外国人官舎は、現在、学内に記念として残っています。全国8ヶ所を渡り歩きましたが、弘前は22年と最長になりました。22年前、弘前の地を踏んだのは中学の修学旅行以来でした。修学旅行では駅前の旅館に宿泊し長勝寺、弘前公園の桜を見たようです。下乗橋で弘前城を背景とした集合写真があり、それには桜が満開で写っていました。

弘前で22年たった今でも、残念ながら津軽弁は分らず、津軽三味線は私にとって、血が騒ぐと言うか、いらいらすると言う印象です。

しかし私は幸運でした。昔の一部の学者や芸術家は宮廷、寺院や教会をスポンサーとしていたが、一般には、その中でも、役者は河原乞食とさえ呼ばれ、食うや食わずの生活をしてきた。昔の人と比べると私はなんと贅沢であったかと今考えます。この39年間好きなことをして給料と研究費を頂いて大変幸運でした。研究費が少ない給与が安いと言い続けて来た事が恥ずかしく思います。定年後は、消極的ですが、なるべく人に迷惑をかけない事を第一義としたいと考えています。もう少し知りたい方は次のホームページに私へのインタビューが載っていますのでご覧下さい。

<http://www.st.hirosaki-u.ac.jp/mathsci/m200612/>

最後に、私を支えて頂いた家族、友人、先生、職場の人たちに深く感謝します。

定年を迎えるにあたって



理工学部 物質創成化学科 教授
大関 邦夫

弘前大学に着任したのは1985年の4月のことです。北海道大学で助手に採用された1970年4月から数えますと、通算の勤続年数は37年になります。一瞬にして過ぎ去ったように感じられるこれらの日々も、個人的な境遇の変化や組織としての大学の変化に対応して過ぎてきた積み重ねであり、その時々思いを馳せれば、感慨深いものがあります。こうして定年を迎えることのできる喜びは誠に大きく、折にふれて適切

なご助言と、お励ましをいただきました皆様に心から感謝申し上げます。

本学に勤務して前半は、卒業研究や修論研究に取り組む学生とともに研究室で大半の時間を過ごし、大学教員としての楽しい生活を満喫できた幸せな期間でした。キャンプをしながらの海水浴や神社にお参りをしてスタートする岩木登山など講座の行事として数年続いたものもありましたし、卒業旅行なるものにも同行したこともありました。留学先でお世話になったウムラント先生が弘前において下さったときには、講座の学生と一緒に青荷温泉にお招きしました。ともかくそのころは、いろいろな場面を学生に見てもらうことが教育の一端であると信じて行動しておりました。

本学の一連の改革の中、共通教育を経て21世紀教育を導入する過程で、教養教育に関わる立場となったときに、教育はチームワークである

ことを強く認識致しました。本学で行われている21世紀教育は、教養教育の改善と向上という共通の目的をもつ本学の教員全員のチームワークのもとに成り立っています。チームとしての調和を保ちながら、21世紀教育と言う名に相応しい取り組みが継続して行われますことを祈って止みません。

それにしても講義することは容易でないとつくづく思います。ある老先生が「今日はいいい授業ができた。でもこういう気持ちになれるのは年に数回しかないんだよ。」とおっしゃっていたのを時々思い出します。定年を迎える私にとってもまさにその通りだからであります。

幸いにしてこれまでに多くの若者と接することができました。皆さんの活躍を期待すると同時に、弘前大学が、これら将来を担う若者の成長の場としてますます発展されますことを心から祈念致します。





計算機 センター の思い出



理工学部 物質創成化学科 教授
須藤 進

今年も、春が来ました。北国に住む者にとって春の到来は格別です。深い雪の中に3ヶ月余、この重たい雪も全てのを暖かく包んでくれていました。春になると、全てのが息吹一度に芽を出し花も咲かせます。このことが、それを如実にあらわしてくれています。私が、弘前駅に降り立ってから、30数年が経ちました。その間、学生諸君の大学本部の封鎖、機動隊の導入、理工学部の創設、国立大学の法人化等、大変なことが色々ありました。街並みも大学のキャンパスもすっかり変わ

りました。しかし、懐かしい山並み、川の流れ、雪、そして変わらず自然のサイクルを営む木々草木、これらを思うと啄木の如く私に言うことは何もありません。津軽の美しい自然、落ち着いた日々の生活、まさに至福の時を過ごさせて頂きました。長い間有難うございました。

私は、分子の電子状態の研究を続けて参りました。当時、弘前大学計算機センターには大型電子計算機用のデータを作るカードパンチャーなどなく、青森市にありました民間の計算機センターまで一日かかりでデータの打ち込みにまいりました。何度かお世話になりましたが、ある時、私の技術が余りにたどたどしく、また、休み期間などの空き時間を利用していただいた関係で、見かねたのでしょうか（同時にキーを打つリズムがプロの方には耳障りだったのかもしれませんが）、プロの方がデータの打ち込みを申し出てくれました。私が半日掛けていたのを、なんと1時間足らずにあっと言

う間に作り上げて頂きました。なんとお礼申し上げたらよいのか途方にくれたものでした。その後、カード読取装置、カードパンチャーなどを備えた沖電気の1号機が納付されました。この1号機は簡単な行列の計算などにもトラブルが生じ、センターの三上さんと沖電気の技術担当の方との悪戦苦闘の末やっと正常に作動した計算機でしたが、メタンの励起状態の計算を仕上げ、論文にしたのが本当に懐かしく思い出されます。

法人化後の弘前大学も教育研究の組織など変化がありました。どのような体制にもそれぞれ一長一短がありますが、大切なことはお互いに信じ合い協力し合ってゆくことと思います。特に、先生方が気持ちに余裕を持って教育研究に取り組める組織作りが必要であると痛感いたしております。最後に、弘前大学の益々の発展と皆様方のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。長い間本当に有難うございました。

退職に あたって



理工学部 総務グループ係長
階上 忠仁

遂に、団塊の世代の一員として還暦にあたる亥年を迎えることが出来、この度平成19年3月末日で大学通算33年間勤務し、定年退職することになりました。この間、民間・岩手大学（10年）・弘前大学（23年）とお世話になり、猪突猛進でこれまで公私ともに勤めてこれたのも、また健康で働くことができたことも、皆様方の御指導と御協力があったがためと深

く感謝申し上げます。これから私は、第二の人生を歩んで行くことになりましたが、弘前大学におかれましては、益々の御発展をされますよう、心からお祈り申し上げます。





大学院での二年間

理工学研究科 地球環境学専攻
長岡 智晶

院での二年間、それは試練の連続でした。

毎日のように課題が生まれ、頭と体をフル活用してそれを解決していく。決まった答えはありません。誰かが教えてくれる訳ではありません。迷っても分からなくても、とにかく一歩ずつ進んでいくしかない。これまで受動的な勉強に慣れていた私に

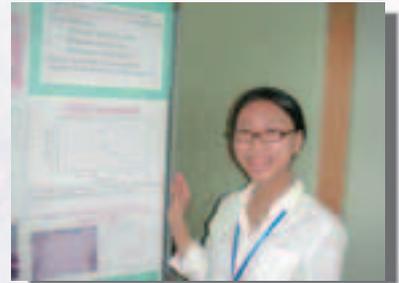
とって非常に難しい、能動的な研究の世界でした。

最初はその世界に戸惑い、分からないことが出てくると「自分にはできない」と投げやりになっていました。そんな時、「このままではいけない！あなたはもっと考えられる。行動しなさい。必ず何かを得られるから。」と指導教官の先生に言われました。私はそれまで考えることから逃げていました。失敗することを恐れ、できることまでやらずにいました。今自分を変えなければ絶対後悔すると思い、それからは何事も全力で取り組むようになりました。周りの友達や先生がそれを応援してくれました。

その結果、私は北京で開かれた石

油に関する国際有機岩石学会に参加することができました。英語での発表、一人海外旅行など初めてのことばかりで大変でしたが、必ずできると信じて努力した結果、目標を達成することができたのです。

院での二年間、それは同時に成長の連続でした。



大学四年間を振りかえって



理工学部 地球環境学科
鈴木 美恵

大学四年間、私は三つのフィールドを持ち、たくさんの経験をしました。

まずは、学校。初めはみんなと同じようにしないと不安でした。しかし次第にしたい事が明確になり今に辿り着けました。四年間で自分が得た能力と知識を活用し研究しています。

次に部活。アメフト部のチームスタッフとして、チームのプライドを守るため、悩み闘った四年間でした。得た物は計り知れません。

そして三つめがアルバイトです。世間知らずの私にとって、人並みの社会知識をつける場となりました。

この三つのフィールドあってこそ、

今の私があると思います。我を見失って後戻りした事もありました。でも、そう思えるのは悩むだけではなく考えた結果だと思っています。悩むだけだと足踏みで結果は出ません。前に進むために考える事が今の私の指針です。これからも私のフィールドは大きくなります。これから社会に出て世の中に貢献し、そして私を支え、投資してくれた家族に恩返しをしていきたいと思っています。こう思える自分を創った大学四年間に会った方々に感謝します。ありがとうございました。



退職にあたって



農学生命科学部

生物生産科学科 教授
嵯峨 紘一

私の出身校である北海道大学では全国の殆どの大学と同様に学園紛争が終息しかけおり、一方、弘前大学では未だ紛争が継続されていた状況下の1970年に当時の農学部園芸学科助手として着任して以来、37年にわたり弘前大学にお世話になりました。1975年には約20年の長きにわたったベトナム戦争でのサイゴン陥落という歴史的映像とともに学生の意識も変化してきたように感じられました。

この37年間を思い起こしますと、「蔬菜（野菜）園芸の教育・研究」を行ってきましたが、栽培生理・品質成分そして組織培養の研究対象とし

てトマト、ナス、ピーマン、トウガラシ、ダイコン、ニンジン、ハーブ類等を取り上げてきました。とりわけ「トウガラシ」に関しては特に大きな位置を占めており、院生時代に恩師より数品種のトウガラシ種子を与えられて以来、辛味成分の測定など現在に至るまで深い付き合いとなってきました。弘前大学着任直後に紹介された弘前在来トウガラシ（清水森ナンバ）のそれまで出会ったことのない形と大きさ・適度な辛味と甘味・香ばしさ、そして鮮やかな果色に惹かれました。研究室に所属した多くの院生・学生とともに、他品種とこの在来トウガラシとの比較を含めてその特性を調査してきました。その過程で化学成分分析に関し多くの先生方からご教示とご助力を頂きました。その結果、弘前在来トウガラシは他品種より優れた特性を数多く有することが明らかになってきました。全国的に地方在来野菜が見直されている現在、弘前在来トウガラシについても生産農家・食品会社・農協・市・県・関連研究機関そして私ども大学研究者も加わり、「清水森ナンバブランド確立研究会」が発足し

ました。正直いいまして私の研究の一部が地域活性化の一助となり、津軽ブランドとして全国展開への可能性をもつことになろうとは思いつかないことでした。昨年この動きが農水省より「食料産業クラスターモデル事業」として指定されました。退職後もしばらくはこの方面でできる限りお手伝いしたいと思っております。

研究材料作物の栽培や学生の圃場実験実習において、作業員の方にお世話になりつつ、真夏には炎天下で真っ黒となり、学生とともに作業したことが貴重な思い出となっております。私どもの研究室を志望してくる学生は野菜栽培実習を講義と同等に重要と考える人が多かったようで、活力溢れる学生・院生は本当に力となるとともに楽しい時を過ごさせて貰いました。

最後になりましたが、在職中お世話になりました皆々様に深く感謝いたします。そして今、厳しい大学淘汰の時代を迎え、弘前大学における教育と研究の独自性を発揮せられ、大いなる発展を祈念申し上げます。

退職にあたり私の思い出



農学生命科学部 事務長
福島 勉

弘前大学に勤務しての思い出としてまず第一に浮かぶのは、大学紛争の事ではないかと思っています。私共の年齢の方々にとっては最も印象に残っている事ではないでしょうか。毎日のように学生のデモとアジ演説、

そして過激派学生による事務局の封鎖があり、仕事も余り手につかない状態でありました。何で学生がこんなに大騒ぎしているのか余り意味も分からず学生とにらみ合い異常な日々を過ごした事を思い出します。

第二に、大学が法人化に移行されたこと（まさか大学が法人化になるとは思っていませんでした）。法人化になると大学がどうなるのか想像が付かない状態でしたが、今年ですでに3年目を迎えました。法人化は大変な事だと思っております。中期目標、中期計画、毎年の運営交付金の1%減、学外による評価等、大学運営に対して風当たりが非常に強くなった事を感じます。

私個人としては、41年間弘前大学に勤務できたことは、病氣らしい病氣もせず健康で過ごせた事もありますが、何よりも良き先輩・後輩と良き友人が得られたからこそと思っています。若い頃は、趣味で朝野球（弘大ライナース）に熱中し、さらに熟年野球（弘大カラート）にも参加させてもらい忘れることはできません。現在は、還暦野球にはまっております。まだまだ体力のある限り退職後も野球を楽しんでいくつもりです。長年携わった仕事に対しての思い出は余りにも多すぎて述べませんが、最後に弘前大学が総合大学として益々発展することを祈念します。

弘前大学 園芸部



農学生命科学研究科 生物生産科学科
大久保 敦史

大学に入った当時は、弘前にこれほど長く居座ることになるとは思っ

てもいありませんでしたが、経ってみればあっという間の6年間でした。大学入学当初に持っていた希望や野望が達成できたかという、なかなか思うようにいかなかった部分もありましたが、予想もつかなかったような出来事もたくさん経験し、充実した日々だったように思います。大学院に入ってからの2年間は、毎日研究に明け暮れ、多くのことを学び、充実した時間を過ごすことができました。実験がうまくいかず、足踏みをしている状態の時期もありました

が、それらも今となってはいい経験だったと思います。学会にも数回参加し、学外の多くの研究者の方々の意見を聞くことができ、非常にいい刺激になりました。新しいことを発見することは、何物にも替えがたい喜びがあります。自らの研究によって得られたものが、世界最先端の知識であるという実感が、大学の研究にはあります。今後は博士課程に進学し、研究を続けていくつもりではありますが、より一層気を引き締めてがんばっていきたいと思います。



「大学4年間、
プライスレス。」

農学生命科学部 生物機能科学科
栃木 隆廣

この4年間を通して、たくさんの友人ができました。学科の仲間やサークルの仲間はもちろんですが、趣味の音楽やバイトや研究室などを通して、同じくらいの年齢で既に社会に出ている人や、自分よりも10歳以上も歳の離れた人たちと話したり

杯を交わしたりする機会に恵まれたことが、この大学生活で最高に価値あることだったと思います。様々な人に出会うと自分を客観的に見ることができたため、大学生として自分が何をすべきか、あるいは社会に出て何をしたいかなどが見えてきた気がします。弘前大学での4年間のおかげで「将来に向けた自分の意思」というものをしっかりと確立できました。もちろん大学生活の全てがうまくいったわけではなく、失敗ややり直したいようなこともあります。それはそれとして今後の人生の糧になればと思います。

私の実家は岩手ですが、実家から離れて生活を送る私を両親は支援してくれました。お盆や正月などでた

まに帰省すると、両親が意外に歳をとっていることに気づかされ、自分がしっかりしていかなければという気持ちになったことを思い出します。両親に心から感謝するとともに、これからの人生をかけ返ししたいと思います。「こんなに楽しいときを与えてくれてありがとう。」



Ⅱ 特集「弘前大学を去るにあたって」



自分で自分をほめたい

学務部 学生課課長補佐
小林 善幸

「自分で自分をほめたいと思います。」
これは、アトランタオリンピック
の女子マラソンで3位でゴールし、

力を出しきった自分自身をほめたたえた有森裕子選手のレース後の言葉です。

私も、「自分で自分をほめたいと思います。」

林野庁から文部省への省庁間配置転換制度で、平成2年1月1日付けで弘前大学に出向してから17年間のレース（勤務）でした。

林野行政から文部行政という全く畑違いの難コース（職場）で、厳しい

レース（勤務）でありましたが、自分なりに精一杯頑張った悔いのないレース（勤務）ができ、ゴール（定年退職）した自分をほめてやりたいと思います。

そして、弘前大学の皆さんの温かい後押しで、ゴール（定年退職）できたことに感謝しております。

ありがとうございました。

弘前大学を去るにあたって

学術情報部 研究推進課課長
佐藤 祥英

昭和42年から40年間弘前大学にお世話になりました。最近、メディアを通じて弘前大学の活動が、毎日のように報道されております。学生諸君は、可能性を秘めている存在であることを自覚し、自ら研鑽に励んでもらいたいと思います。それは勉学面あるいは課外活動面でも良いと

思います。そのことが弘前大学が輝くことに繋がって行くと思います。キャンパス等の環境整備も進んでおります。「輝け弘前大学！」

弘大を去るにあたって



学術情報部 学術情報課 課長補佐
齋藤 穂

図書館職員には、引き継いだ図書館資料を次世代に引き継ぐという大きな使命があります。この仕事に携われたことに感謝したいと思います。お世話になりました。



学術情報部・学術情報課



Ⅲ 研究室の紹介

理工学部・物質理工学科 (物質創成化学科) 澤田研究室



理工学部 物質創成化学科
澤田 英夫

1 様々なユニークな性質を示すフッ素化合物

一般に、フッ素原子を多く含む有機化合物は相互の分子間力が弱い為、液体においては表面張力が低く揮発しやすく、固体においては融点が低く昇華しやすい等の性質を示します。特に、炭素数2以上の長鎖のフルオロアルキル基を有する化合物においては、電気陰性度の高いフッ素原子に起因した強く反発する性質、すなわち撥水、撥油性、耐熱性、耐候性さらには耐薬品性等の機能が付与された材料の開発研究が活発に行われ、数多くの化合物が製品化されております。高分子化合物においても、フッ素のこのような高い耐候性さらには水および油をはじく性質（撥水・撥油性）が巧みに活かされた商品として、ポリテトラフルオロエチレン（テフロン^{TR}）等のフッ素系高分子化合物が種々の分野において多用されており、実際、フライパンの表面処理剤、電気ポットの内側の表面処理剤、高層ビルの外壁の塗装および明石海峡大橋等の大型の橋の外装用塗料等に利用されています。

2 水および油をはじくテフロン^{TR}から水および油によく馴染むフッ素系高分子化合物の開発へ

テフロン^{TR}等のフッ素系高分子化合物のこのような水および油をはじき、互いに反発する性質とは逆の特性、すなわち、水および油によく馴染み、さらには凝集しやすい性質をフッ素化合物、特に高分子フッ素化合物に付与させることが可能となれば、今までのフッ素化学には見られないきわめてユニークな化学の創成につながります。今までに開発されたフッ素系高分子化合物のなかで、長鎖のフルオロアルキル基が高分子化合物中に導入された化合物も現在までに数多く合成されてきております。しかしながら、このようなフッ素系高分子化合物も一般に水さらには油に馴染み難いものが多いのが実情でした。さらに、これらフルオロアルキル基含有高分子化合物はフルオロアルキル基がエステル結合等を介してランダムに、もしくはブロック的に導入されているためフルオロアルキル基はこのエステル結合により加水分解を受けやすく、フッ素に起因した高い界面活性な機能を発現し難い等の問題点を有しておりました。しかしながら、我々の研究室で最近開発されたフルオロアルキル基が高分子末端のみに直接炭素-炭素結合で導入された新規な化合物は、興味深いことに、フルオロアルキル基がランダムもしくはブロック的にエステル結合等を介して導入された従来の高分子化合物には見られない極めて数多くのユニークな性質、例えば水さらには油に対して極めて高い溶解性を示し、フッ素に起因した高い界面活性な機能をも従来の低分子フッ素系界面活性剤と同等もしくはそれ以上に示すことを発見しました。特に注目している点は、これら新規に見いだされたフッ素系高分子化合物は従来のフッ素系高分子化合物が反発しやすい特性を示すのに対して、逆に凝集しやすい性質をフッ素系高分子化合物において初めて見いだしたことです。現在では、これら新しいタイプのフッ素系高分子化合物の開発とそのユニークな機能の解明に関する研究を理工学部・物質理工学科設計分子工学講座で積極的に展開させております。なお、これら研究成果に対して昨年の9月に高分子学会から高分子学会三菱化学賞を受賞しております。





3 澤田研究室のメンバーと1年間の研究活動について

澤田研究室は現在（平成18年12月現在）、17名の学生が所属しております。内訳は、大学院博士後期課程2年1名、1年2名（内1名は社会人）、大学院博士前期課程2年6名（内1名は社会人）、1年4名、学部4年4名です。なお、博士後期課程1年の1名の学生は、博士前期課程修業年限短縮者です。現在、新たに学部3年4名の仮配属が決まりました。



研究室の1年間の研究活動について、特に新しく配属される学部4年生について簡単に紹介します。学部4年生は4月に入り正式に研究室に配属されてから、約1ヶ月間研究室の先輩学生より、実験装置の取扱方法、実験方法さらには研究の内容等について詳細にかつ具体的な指導を受けます。このときには、A4 1枚程度

の研修レポートを毎日提出させます。これを後で読みますと先輩学生達の指導内容や学生の個性等が読み取れ、後日この内容を指導学生にフィードバックさせております。5月の連休明けに、正式な研究テーマが与えられてから卒業研究がスタートします。研究室では週に一回のペースで自分の研究に関連する論文の紹介とフッ素系高分子化合物の合成に関する英語の専門書の輪読をそれぞれ2名が担当して行っております。また、研究の進捗状況をチェックするため、2ヶ月に一回のペースで研究中間発表会を行っております。4年生は1年間の研究成果を学内の卒業研究発表会で発表する以外に、必ず翌年の3月末に開催される日本化学会春季年会さらには翌年5月に開催される高分子学会年次大会で全員が発表することをモットーに指導を行っております。大学院の学生においては、これらの学会での研究発表以外に国内で毎年開催されるフッ素化学討論会、高分子討論会、高分子学会東北支部研究発表会、材料技術研究協会討論会等で研究成果を発表し、さらにはチャンスがあれば海外で発表できるよう指導を行っております。これらの学会等で発表を行うことにより、研究室の学生は自分の研究成果をまとめさらにプレゼンテーションする能力が高められます（これらは社会に出て必ず役に立つものと自負しております）。研究室内の学生諸君の上記学会、討論会さらには研究会におけるポスター発表および口頭発表に対するアクティビティーの高さは、最近2年間においても以下のようなゴールドポスター賞、優秀学生講演賞、若手優秀発表賞等の成果に繋がっております。

平成17年：ゴールドポスター賞2件、優秀学生講演賞1件、若手優秀発表賞1件

平成18年：ゴールドポスター賞2件、若手優秀発表賞1件

以下、最近我々の研究室で見いだされた興味深い研究成果を紹介します。

4 フルオロアルキル基含有オリゴマー類の高い表面配向性を活かした表面処理剤の開発と商品化への展開

我々の研究室で初めて見いだされたフルオロアルキル基が高分子両末端に直接炭素-炭素結合で導入された化合物の、高い界面活性な性質を活かした新しいフッ素系高分子表面処理剤としての商品化への研究として、これらフルオロアルキル基含有高分子化合物によるゴム製品の表面処理への展開をゴムメーカーとの共同研究により進めました。その結果、一連のフルオロアルキル基含有高分子化合物の中で、特にフルオロアルキル基含有ビニルトリメトキシシランオリゴマー $[R_F-(CH_2CHSi(OMe)_3)_n-R_F]$ （ R_F = フルオロアルキル基）が各種ポンプ用の傘状のゴムの表面処理剤として有用であり、表面処理さ

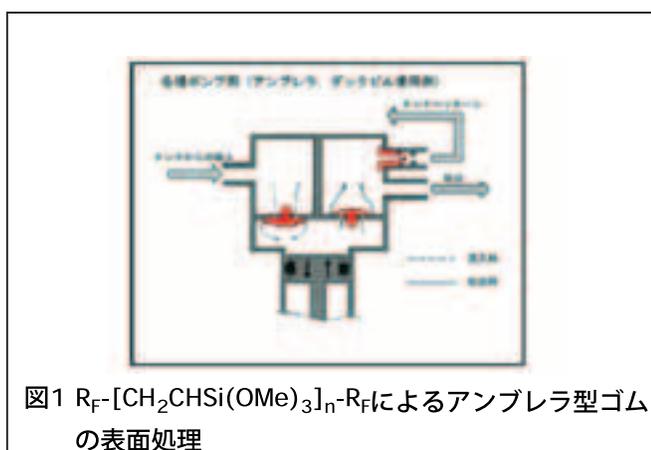
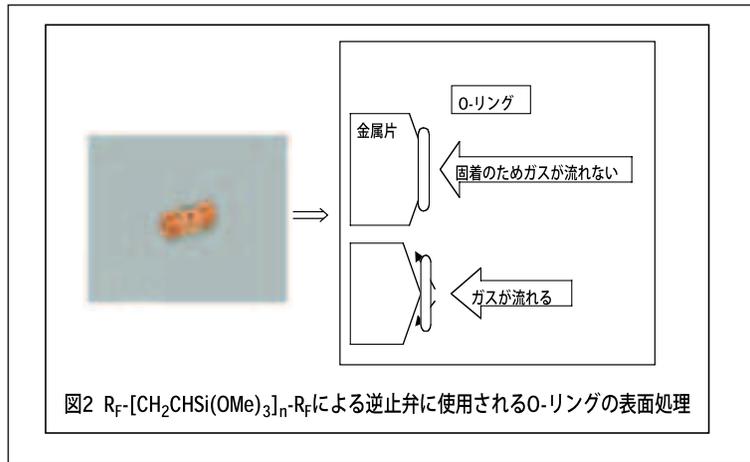


図1 $R_F-[CH_2CHSi(OMe)_3]_n-R_F$ によるアンブレラ型ゴムの表面処理



れた傘状ゴムにおいては基材との離系性が極めて高まることが初めて見いだされました（図1参照）。実際、本研究により開発されたこのゴム製品は現在、共同研究先のゴム製造メーカーにより製造されるに至っております。

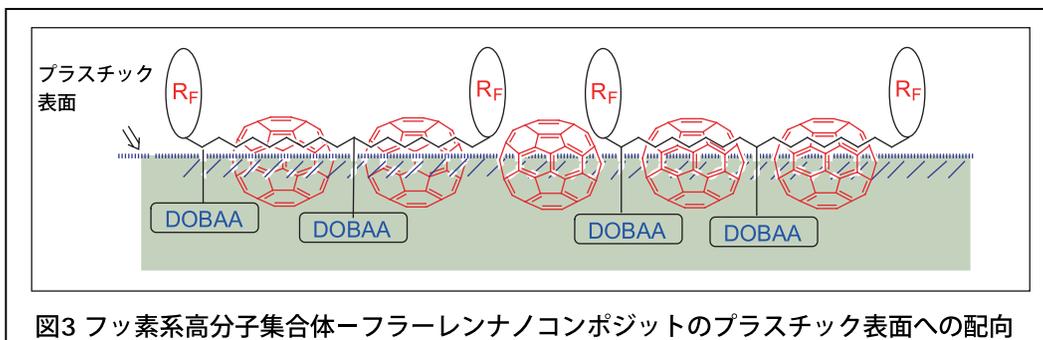
フルオロアルキル基含有ビニルトリメトキシシランオリゴマーはまた、逆止弁に使用されているO-リング表面の処理剤へも応用され、金属片とO-リング表面との固着防止機能の発現に初めて成功しました（図2参照）。現在においては、同じゴム製造メーカーにおいて表面処理されたO-リングが製造されるに至っております。



5 凝集作用を示すフッ素系高分子化合物の開発と機能の解明

今までのフッ素化合物はフッ素の強い電気陰性度のため互いに"反発"する機能が強く、これらの機能が活かされた撥水、撥油剤等の分野への応用が数多くなされてきました。しかしながら我々の研究室で開発されたフッ素系高分子化合物においては、フッ素が互いに"反発"するのではなく、逆に"凝集"する機能が世界的にも初めて見いだされました。この機能が活かされると、従来のフッ素化合物には見られない極めてユニークな機能の創成が期待できます。実際、含フッ素高分子化合物における末端に導入されたフルオロアルキル基同士の"凝集"効果が効率よく作用し、ナノレベルで構造が制御されたフッ素系高分子集合体を構築します。このフッ素系高分子集合体は新しいフッ素系ホスト場として作用し、エイズウイルス、バクテリアさらにはフラレン、カーボンナノチューブ、金属ナノ粒子、光機能性色素等の特定のゲスト分子と極めてユニークなホスト-ゲスト作用を創出することも明らかにさせ、新しいフッ素系ナノ材料としての位置付けを明確なものとしております。

例えば、フッ素系高分子集合体 $[R_F-(DOBAA)_n-R_F]$ - フラレン（もしくはカーボンナノチューブ）ナノコンポジットは以下の図3に示すように、汎用のプラスチック表面へフラレン（もしくはカーボンナノチューブ）を効率よく配向させることがき、フッ素に起因した機能以外にフラレン（もしくはカーボンナノチューブ）に起因した極めてユニークな機能をプラスチック表面に付与させることを見いだしました。このフッ素系分子集合体-フラレンもしくはカーボンナノチューブナノコンポジットは汎用の有機溶媒以外に水へも容易に可溶化するため、医療分野を始め種々の分野での応用展開が大いに期待されております。

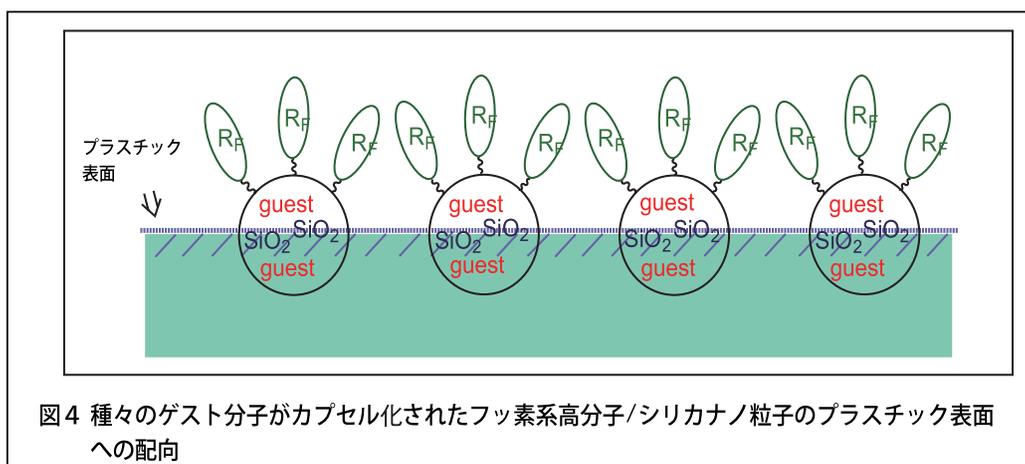




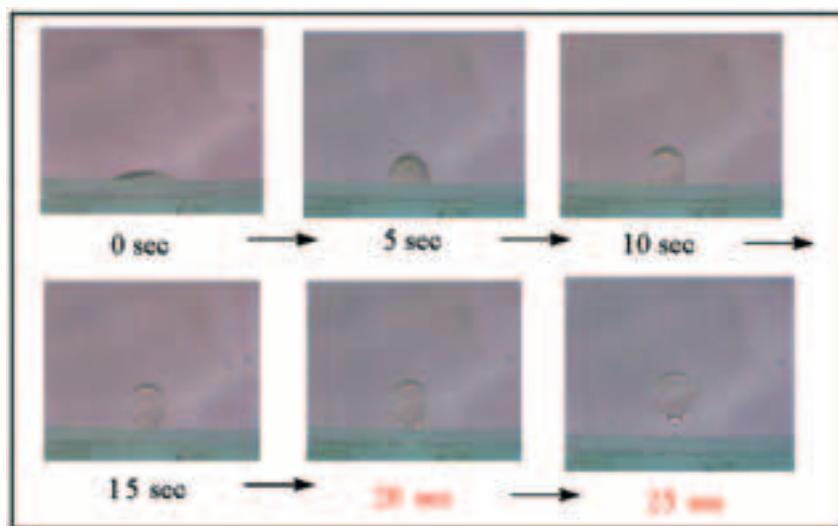
6 フッ素系高分子ナノ粒子の開発と洗剤を使用せず水洗いのみで油汚れを除去する環境適応型コーティング膜の開発

新しいフッ素系機能性材料の創製の観点から、ナノレベルでその構造がフィックスしたフッ素系高分子ナノ粒子の調製は極めて興味深いものです。このような観点から、先に示したフルオロアルキル基含有高分子化合物をシリカナノ粒子さらにはテトラエトキシシランと反応させることにより、一連のフルオロアルキル基含有高分子/シリカナノ粒子の創製に成功しました。これらフルオロアルキル基含有高分子ナノ粒子の調製においては、安定なラジカルさらにはイオン液体等のゲスト分子をも効率よくコンポジット内へカプセル化できました。

これら一連のフルオロアルキル基含有高分子/シリカナノ粒子は種々の基材への密着性が極めて高く、ガラス等の汎用の無機材料さらにはポリ（メチルメタクリレート）等のプラスチックの表面処理剤として有用であることも明らかとさせました（図4参照）。



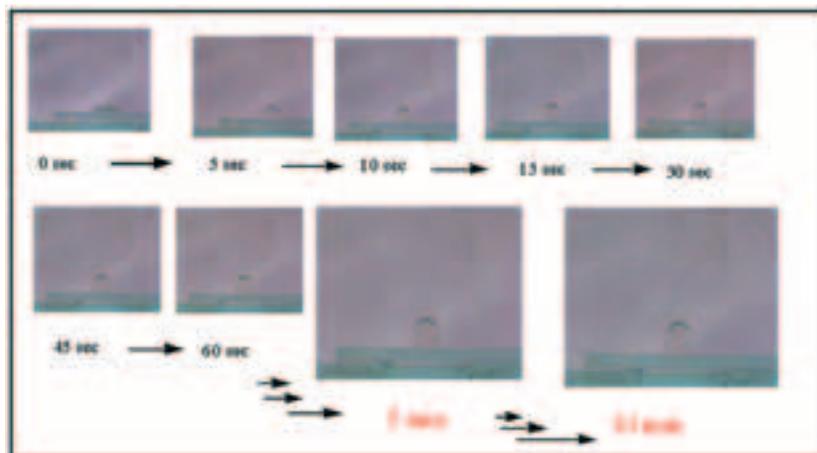
特に、フルオロアルキル基含有アクリル酸オリゴマー/シリカナノ粒子は、ガラスメーカーとの共同研究により、ポリメチルメタクリレート等の汎用のプラスチック以外にガラス食器類に対しても極めて高い密着性さらには材料表面に防汚・親水効果を発現させることを初めて明確にさせました。すなわち、これらフッ素系高分子ナノ粒子により処理されたガラス表面は油汚れに対して洗剤を必要とせず、高い洗浄性を示すことが明らかとなりました。下の写真は本共同研究により開発されたフッ素系高分子ナノ粒子で表面処理されたガラス基盤上に付着した大豆油を水槽内へ入れたところ、25秒後にガラス基盤上に付着した油汚れが基盤から水槽へリリース、すなわち付着した油汚れが水に漬けるだけで容易に除去できることを示しております。



一方、未処理ガラスに付着した油汚れは以下の写真に示すように10分経過してもガラス基盤から除去できず、水に漬けるだけでは油が除去できないことを示しております。



これらフッ素系高分子ナノ粒子で処理されたガラス表面は、表面に付着した油汚れを水で濯ぐだけで容易に除去できることが明らかとなりました。このように、我々の研究室で開発されたフッ素系高分子ナノ粒子は洗剤を必要としない新しい環境調和型表面処理剤として、実際、種々の分野から高く評価され実用性の極めて高い材料として位置づけられております。



7 おわりに

我々の研究室で開発されたフルオロアルキル基が末端に直接炭素－炭素結合により導入された高分子化合物は、従来のフッ素系高分子化合物には見られないきわめてユニークな機能を示す新規な化合物であります。新規な材料には、今までに数多くの技術者、研究者によりその機能の解明がなされてきた既知な材料にはない大きな可能性が潜んでおります。この可能性を探究し、従来の材料には見られない新たな機能を見出すことに研究者の醍醐味があると考えており、この点を研究室内の学生に強調し研究指導を行っております。新規な材料の開発さらには新規な材料に起因するユニークな機能の解明は外部の研究機関との共同研究へと研究の幅が広がり、研究の質の向上にも繋がります。これらの研究活動を通して研究室内の学生諸君には研究のオリジナリティーの重要性を実感していただき、この力を近い将来、企業等の研究機関で十分に発揮していただければと常日頃考えております。

Ⅳ 新任教員自己紹介

人文学部 ビジネスマネジメント講座 講師

金 藤 正 直



昨年の12月に着任し、原価計算の講義を担当しています。近年企業や自治体では、単に経済面だけではなく、環境問題や労働安全衛生など環境面や社会面への対応も必要とされています。私は、これらの側面を考慮に入れ、効果的かつ効率的に業績を上げていくための経営および会計の両モデルについて研究しています。本学において、私は、講義やゼミナールなどを通じて、こうした内容を学生の皆さんに伝えていだけではなく、一緒に考えていきたいと思っています。宜しくお願いします。





V けいじばんコーナー

平成18年度学位記授与式及び 平成19年度入学式日程等一覧

●●●平成18年度学位記授与式●●●

	挙行日(曜日)	開始時刻	挙行場所	備考
学部	3月23日(金)	10時00分	弘前市民会館	全学部
大学院	3月23日(金)	13時00分	創立50周年記念会館	全研究科

●●●平成19年度入学式●●●

	挙行日(曜日)	開始時刻	挙行場所	備考
学部	4月3日(火)	10時30分	弘前市民会館	人文学部・教育学部
		13時00分		医学部・理工学部・農学生命科学部
大学院	4月3日(火)	9時00分	創立50周年記念会館	全研究科

奨学金についてのお知らせ

◎ 日本学生支援機構奨学金

平成19年3月満期の皆さんへ

平成19年3月満期となり「返還誓約書」を提出済みの皆さんは、今後次のいずれかの手続きが必要ですので、忘れずに手続きしてください。

1 就職する場合

「返還のてびき」に挟み込まれている「リレー口座」の用紙に記入・押印のうえ、返還を希望する金融機関へ提出してください。(記入については金融機関にお尋ねください。なお、リレー口座用紙の予備は若干ですが学生課にあります。)

遅くとも平成19年4月末までに、忘れずに提出してください。

平成19年10月から返還が始まります。

2 進学等で大学院等に在学する場合(留年を含む)

「返還のてびき」の巻末にある「在学届」に必要な事項を記入のうえ、19年4月以降在学する学校へ提出してください。提出は19年4月1日以降になります。



3 返還猶予を希望する場合

就職未定や病気などの理由により返還猶予を希望する場合は、「返還のてびき」にある「奨学金返還期限猶予願」に必要な証明書類を添付のうえ、日本学生支援機構へ提出してください。証明書類の詳細等については日本学生支援機構へお尋ねください。

現在貸与中の皆さんへ

○ 奨学金の振込日について

平成19年度から学部生についても4月分が4月に振り込まれます。【19年度は4月20日（金）】

ただし、インターネットによる継続の手続きを忘れた場合や、修得単位数の不足などにより奨学金が停止・廃止となった場合は、振込がありません。

平成19年4月から奨学金を新規希望する皆さんへ

○ 学部生

平成19年4月6日（金）15:00から学部生2年次以上を対象とした説明会を実施する予定です。詳細は、3月下旬に掲示しますので掲示板に注意してください。

※新入生を対象とした説明会は「入学者案内」に掲載しています。

○ 大学院生

新入生及び在學生とも3月末～4月初旬に申し込み願書を配布予定です。詳細は3月下旬に掲示しますので掲示板に注意してください。

◎ 機構以外の奨学金制度について

弘前大学に募集がある場合は、その都度一覧にして掲示しています。条件等をよく読み学生課窓口に応じ込んでください。

なお、大学を経由しない場合もありますので、各自治体のホームページなどに注意してください。

学務部学生課 奨学金担当 0172-39-3135

VI 編集後記



百年に一度とも言われた今冬の少雪、異常が異常でなくなりつつあると考える

るのは私だけでしょうか。地球の将来を担う人材が、今年も社会へ巣立つ季節となりました。

学園だより154号の特集は「弘大を去るにあたって」です。今号は新しい試みとして、定年退職されるすべての方に寄稿をお願いしました。ただ、紙面に限りがあるため、字数の枠付きでお願いせざるを得ず、ご不満もあったことと思われます。定年を迎えた人にとっては、弘大は生活と社会活動の支えであり、勤務された時間の長短にかかわらず大切な職場であったことなのでしょう。一方、弘大からみれば、退職者の方々の力によって支えられ、ここまで発展できたと思います。ご寄稿の文に込められた思いを弘大の将来のために生かされることを期待します。

(T.A)



日本酒「弘前大学」を生涯の逸品としてご愛着下さい

弘前大学金木農場産米から作られる日本酒「弘前大学」は、この2月に4期目の新酒が仕上がりました。平成19年ご卒業の皆さんが入学した年度に、附属生物共生教育研究センターを中心として関係する方々の努力が実り産声を上げていたわけです。

全国で大学名を冠したお酒は沢山ありますが、大学の附属農場で教職員と学生が丹精を込めて育てたお米を使用した「弘前大学」は、純粋な大学特産酒として草分け的な位置を占めており、弘前大学オリジナル品として誇りを感じてもらいたいお酒です。

以下、今年の新酒ができるまでを紹介することで、さらに「弘前大学」に対する愛着を高めていただき、生涯を通してご愛顧下さるよう切望いたします。

農場産「豊盃米」の精米



春に作付けされた豊盃米は、10月に収穫後、弘前市石渡の三浦酒造で55%まで精米されます。この段階で約2トンの量は1.2トんに減ります。

炊飯後もろみに熟成



12月中旬、炊飯後よく管理された環境で、専用タンクでもろみに熟成されます。この過程が味を決めるので、温度の管理に一番気を使います。

しぼりと瓶詰めで完成



1月末から2月初旬にかけて、もろみをしぼり「弘前大学」が仕上がりました。19年は昨年と同じ4000本（四合瓶）を皆さんにご提供できます。



「弘前大学」新酒は3月のご卒業・ご退任の諸慶事の中で楽しみをいただけますが、ご購入につきましては弘前大学生協で取り扱っておりますので以下にご案内いたします。

- ・取扱店舗 弘前大学生協スィリジエ（食堂前コンビニ店）
〒036-8224 弘前市文京町1番地
TEL 0172-34-4622 FAX 0172-34-4623
- ・販売価格 1本（四合瓶）1700円（消費税込み）※19年度は4千本限定で販売予定
- ・購入方法 店舗販売、電話・FAX等での申込みは宅配も受付けます（送料別途）

弘前大学生協より在学・在任中のご利用を深く感謝いたします

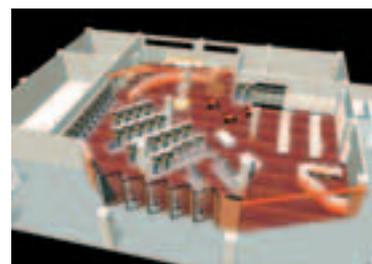
《出資金返還手続きのお知らせ》

弘前大学を離れるにあたって出資金の返還手続きを案内中です。まだ未手続きの方はお忘れのないようお願い申し上げます。在学、在任中は生協をご利用いただきまして誠にありがとうございました。

- ①店舗で「出資金返還&身分変更申込用紙」に記入
- ②振込での返還なので金融機関口座をご用意下さい
- ③振込日は5月18日（金）の予定です
なお、今後も組合員としてご利用を希望される方は、店舗にてお申し出下さい。

《会館店舗がリニューアルいたします》

平成18年4月の「スィリジエ」オープンに続き、19年3月22日に現会館店とプレイガイドが統合リニューアルいたします。（下記イメージパース参照）ぜひ新店舗もご支援賜りますようお願い申し上げます。





弘前大学 学園だより Vol. 154
2007年3月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。
e-mail jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp
弘前大学学務部学生課

国立大学法人 弘前大学
「学園だより」編集委員会
委員長
氏家良博(教育・学生委員会)
委員
渡辺麻里子(人文学部)
太田誠耕(教育学部)
松谷秀哉(医学部医学科)
稲葉孝志(医学部保健学科)
遠田義晴(理工学部)
浅田武典(農学生命科学部)
笹森利通(学生課)
石岡勝彦(学生課)
印刷：やまと印刷株